

【聴楽015】近世の女筆^{※1} 手本 (2-近世刊行の女筆手本類) ———— 小泉吉永

第1章 書籍目録による検証

◆書籍目録

- 出版業が飛躍的に発展した江戸時代には数多くの書籍目録が誕生。→ 寛文6年(1666)頃から享和元年(1801)に至る約150年間に23種^{※2}。写本では、東寺観智院蔵の万治2年(1659)10月書『新板書籍目録^{※3}』がある。
- これらの書目には本の種類、書名、概要、作者、板元、価格等についての情報が含まれ、当時の出版物を探る重要資料。
→ うち14点が『〈江戸時代〉書林出版書籍目録集成^{※4}』に影印収録され、当時の書籍目録のほぼ全貌が把握できる。
- 江戸時代の書籍目録には大きく2つのタイプ。

①部類分け目録……最古の書目(刊本)は寛文6年頃刊『寛文年間書目^{※5}』で22分類(経・天台并当宗・法相・律宗・俱舎・真言・禅・浄土并一向・外典・詩并聯句・字集・神書・曆書・軍書・医書・歌書・和書并仮名類・連歌・俳諧・舞并草紙・往来物并手本・釣物并絵図)。寛文6年頃・同10年・同11年・延宝初年・延宝2年・延宝3年・貞享2年・元禄5年・元禄12年・享保14年・宝暦4年・明和9年・享和元年の13種刊行^{※6}。最後の『享和元年書目』は、元禄5年・享保14年・宝暦4年・明和9年の各目録の板木を任意に取捨選択して編んだ合成複製版のため、『明和9年書目』が事実上最後の書目。

②伊呂波分け目録……まず書名でイロハ分けし、イロハ各部の中を「儒書」「医書」「仮名書」「仏書」の4門に分類(上位分類にイロハ分け、下位分類に内容による区分を採用するのは「節用集」などになったものであろう)。この方式の長所は書物の内容に通じていなくても書名だけで引ける点にあり、また、当時の書物は書名で大体のジャンルを想像できたと思われるので、「儒書」以下4門というシンプルな分類は早引きに適していた。この種の書目は、延宝3年・天和元年・天和3年・元禄9年・元禄9年増補版・元禄11年・宝永3年・宝永6年・正徳5年・享保7年以降刊の10種刊行。

•「部類分け目録」が江戸前期から中期にかけて比較的長期にわたって京都で刊行。他方、「伊呂波分け目録」は江戸から始まり後に京都でも出版され、延宝～元禄(1673～1704)の約30年間に集中的に刊行され、享保初年で消滅。

◆部類分け目録の例——『元禄5年書籍目録(広益書籍目録大全)』5巻



一 庭訓性業 <small>十二月七巻の字札 女系より採りし</small>	一 月 字及ぶより七行のうか付 あつた付 古事系 片里付 字南 字純 性四 六橋 近藤 幸叙	二 月 字南 大字	二 月 仲安大字	四 月 繪入 <small>苗村文信考</small>	二 月 首書 <small>月依</small>	二 月 抄 <small>カメナ</small>	三 月 平の抄	二 月 新撰抄 <small>書籍大目録 八四十四</small>	三 異制庭訓 <small>虚関作</small>	一 式 月 <small>貞和の之通 三平 泰時 六人 性家 家定 性久 性忠 性仍 七仍 性付 性之 性付 性其 性子 性高 性仍 性大 性橋</small>	一 月 歌書 <small>苗村大信</small>	二 月 法入	二 月 註	二 月 抄	六 月 傍解 <small>清三 道環 聖軒</small>
--	---	-----------	----------	-----------------------------	--------------------------	--------------------------	---------	-----------------------------------	---------------------------	--	----------------------------	--------	-------	-------	--------------------------------

三 月 字南 性	二 秘系文字系	二 写系文字系	二 大橋のう文章	一 初字の系 <small>六平 文字</small>	一 具足文章	二 尚用集	二 名書集	三 系訓集	二 字月集	二 傍湯の系集 <small>傍湯 修善 三平 八人</small>	二 五文抄	一 弟字巻 <small>書籍大目録 八五十一</small>	二 系書文字巻	二 書札文字巻	二 女系文字巻	一 小形の系文字巻	一 月 傍補	二 女修の系	一 系書文字	一 七のうは	一 系書法巻	二 系書書
----------	---------	---------	----------	-----------------------------	--------	-------	-------	-------	-------	--	-------	---------------------------------	---------	---------	---------	-----------	--------	--------	--------	--------	--------	-------

一 流の系	二 光流の系 <small>光流 修善</small>	一 大所修善	二 大和刻蓋田池碑塔 <small>修善 山美 下之</small>	三 書録初字抄	二 難字性系	七 歳流書札大全 <small>女系</small>	一 女流の系	二 月 小形の系 <small>小形 修善</small>	二 女流の系 <small>書籍大目録 八五十一</small>	一 系書文字	一 系書文字	一 百人一首 <small>百首 修善</small>	一 系仙 <small>月仍</small>	三 女系修善 <small>中川 修善</small>	三 女流の系	三 女初字の系	三 月 傍補	三 女系の系	三 女系の系 <small>一 系書 二 系書</small>	三 女系の系 <small>一 系書 二 系書</small>	三 女系の系
-------	-----------------------------	--------	------------------------------------	---------	--------	----------------------------	--------	-------------------------------	----------------------------------	--------	--------	-----------------------------	------------------------	-----------------------------	--------	---------	--------	--------	-------------------------------------	-------------------------------------	--------

三 女流の系	二 女今川	三 女系初字抄	二 女系の系	一 八のうの系
--------	-------	---------	--------	---------

◆「部類分け目録」による近世の女筆手本類の出版動向 *「女筆」項および女性用手本を中心にみていく

○『万治2年書目』(1659年)

- ・刊本最初の『寛文年間書目』に先立つこと約7年の万治2年成立。万治2年10月11日呆快筆の識語があり、本書目には同年秋の最近刊の書名も含まれるため、編者は書肆または出版界に深く関与していた者であろう^{*7}。次項『寛文年間書目』の母胎となった書目で、多少の分類意識はあったようだが、分類項目を明確にしていない点で過渡的。
- ・往来物関係では『寛文年間書目』所載本のおよそ半分を掲載。うち女筆手本類は、『女筆手本』1冊と『女庭訓』3冊の2点である。前者は現存本が特定できないが、後者は和田宗翁(一華堂)作、女流書家の窪田やす書であることが『寛文10年書目』等により明らかである。

○『寛文年間書目』(寛文6年頃=1666年頃)

- ・刊本最古の『寛文年間書目』には、全22分類中の第21番目に「往来物并手本」、そして最後に「釣物并絵図」の項目を掲げる。収録順序は書物に対する価値観をある程度反映したものと考えられるから、往来物は書籍一般では最下位の認識であったと見てよい。
- ・合計128点の往来物が見え、往来物が近世初期より出版業界における確実な市場であったことを物語るが、その128点中4点(「一冊 女筆手本」「二冊 同二ノ^{*8}」「一冊 同かほよ草」「三冊 女庭訓」*『女筆二ノ』『女筆かほよ草』)の2点が新規掲載)が女子用往来でいずれも女筆手本と推定される。当時、絵入本や頭書付きの往来物は少なく、ほとんどが大本の手本であった。

○『寛文10年書目』(1670年)

- ・4年後の『寛文10年書目』では分類項目が36点に増加。この改訂でも「往来物并手本」の項目はそのまま継続。掲載点数は先の128点に対して本書目が125点と一見大差ないが、次の変化が見られた。

- ①掲出往来物の増減では、少なくとも8点の往来物を削除し、約30点の往来物を追加。
- ②女子用往来を独立させて「女書」の項目を新設。掲載書も4点から19点へ急増^{*9}。
- ③石摺・法帖類および筆道書類を独立させ「石摺并筆道書」の項目とした。掲載書も24点から77点へ急増。
- ④『初学文章』を新設の「躰方書并料理書」項に移動させたうえ^{*10}、同項中に『初学文章増補』も追加。

→ すなわち、『寛文年間書目』では往来物とその類書が「往来物并手本」項で一括把握されていたものが、本書目で独立・分化した項目が多い。他項への移動分も含めると本書目中の往来物は合計223点となり、実質的にかなりの増加となる。特に、女子用往来の占める割合がますます高まり、「女書」項の新設に及んだ。

- ・「女書」項に見える女筆手本類は次の8点で、特に作者・筆者を明記するようになった点が新しい。

三冊 女庭訓 一花堂作 大津のやす女筆	★三冊 女初学文章 右之作 右之筆
一冊 かほよ草 手本	女筆手本 一冊女筆ノ二冊小野のつう女
★三冊 女筆往来 中川喜雲作	★三冊 女筆文章
★二冊 女用文章	

→ ★4点が新規掲載だが、本来『寛文年間書目』に載るべき『女初学文章』(万治3年刊)が初めて登場するように当時の書籍目録は不完全かつ不備なものであった。

- ・本書目に続く『寛文11年書目』の女筆手本類は、記載上の微細な変化を除き本書目と同じ。

○『延宝3年書目』(1675年)

- ・4年後の『延宝3年書目』では、分類項目数が36から38に増えた。往来物関連の項目は「往来」「女書」の2つで以前と同様だが、次の変化が見られた。なお、掲載された女筆手本類には変化はない。

- ①「往来」項では掲載書に2、3の減少が見られたが、新たに約25点の往来物を掲載。これらの多くが「頭書」を付す新編の往来物で、頭書が一般化した年代もほぼこの頃と分かる^{*11}。
- ②「女書」項に『平がな列女伝(仮名列女伝)』を追加。
- ③従来、往来物に分類された『董蒙字尽』と『名字尽』の2点が「字書」項に移動。

○『貞享2年書目』(1685年)

・本書は『延宝3年書目』の増補版だが、次の変化が見られた。

①「往来」項末尾に1丁半の「増補」をしており、女子用往来を含む約40点の往来物を追加。特に、往来物が産業(職業)・社会(法令)・地理その他の分野に広がっている点は注目すべき。

②従来、女筆手本と女訓書が「女書」項にまとめられていたが、本書目で『女庭訓』以下7点の女筆手本類が「女書」項^{*12}から「往来」項末尾の増補部分へ移動。→ 増補部分の女筆手本類のうち新規掲載分は次の5点で、『小野づづ手本』2冊本は従来『女筆手本』2冊と記載されていたものと同ーと考えられる。

- | | | |
|----------|----------|--------------------------|
| 三 四季仮名往来 | 三 女学仮名往来 | 三 増補女初学文章 ^{*13} |
| 二 御所女筆 | 三 女筆手本尽 | |

○『元禄5年書目』(1692年)

・7年後の『元禄5年書目』は『貞享2年書目』の改編版だが、分類項目が38から46へと増加。また、次の変化が見られた。

①「往来手本類」中の一般の往来物(女子用以外)は約40点増加。特に、頭書や挿絵を加えたものや注釈書など、手本以外の形式の往来物が続々登場。

②先の書目で女子用往来は女訓書類(「女書」項)と女筆手本類(「往来」項末尾「増補」部分)の2カ所に分けて記載されたが、本書目では後者に「女手本」の見出し語を新たに付す。

③「字書」項や「石摺并筆道書」項にも若干の往来物が散見される。

・本書目での新規掲載の女筆手本類は次の4点。^{*14}

- | | | | |
|----------------------|----------|----------|-----------|
| 二 女今川 ^{*15} | 三 女書翰初学抄 | 二 女文章かゝみ | 一 ひいな女筆手本 |
|----------------------|----------|----------|-----------|

○『元禄12年書目』(1699年)

・7年後の『元禄12年書目』では、分類項目数が46から43へやや減少。往来物関係には大きな変化はないが、次の点を指摘しておく。女筆手本類の記載項目数も本書目において始めて減少^{*16}。

①「往来」項はほとんど変化なし。実質的に新刊書は皆無 → この時期に往来物の出版が停滞したことを物語る。

②『元禄5年書目』まで「女書」「女手本」の2項目に分割された女子用往来は、本目録において再び「女書」の項目に一本化。掲載書は約40点から約30点に減少。新刊書も皆無で、最初の書目から約35年にして新刊書ゼロとなる。

③本目録でも「字書」「石摺并筆道書」「画并印ひいながた」項に往来物が散見される。

○『享保14年書目』(1729年)

・元禄期後半と打って変わって本書目には新刊書が多数掲載。→ 特に女子用往来・百人一首が急増。従来、往来物全体の2割前後であった女子用往来(百人一首を含む)は、江戸中期を迎えてほぼ4割を占めるようになった。

・分類項目数は『元禄12年書目』と同様に減少傾向を示し41項目となったが、最大の変化は掲載基準の変更である。すなわち、従来の目録が先行の目録を増補または削除する方法で編まれているのに対し、本目録はほとんど新刊書のみを掲載している^{*17}。『〈江戸時代〉書林出版書籍目録集成』第3巻の阿部隆一氏解題^{*18}にも「本目録の著録書は元禄以前の刊本は殆ど影を隠し、その後の元禄中期頃からの新刊書を主として、総数約3300部を録する。もともと元禄5年以前の刊行書も少しは入っており」とある。新刊書の急激な増加により収録点数が膨大となったため、先行書目との併用が必須となったことを示す。

・本目録で生じた往来物関係の変化は次の通り。

①「往来手本類」項に34点もの「節用集」が盛り込まれた。次の『宝暦4年書目』以後は「節用集」という独自項目を立てている点からすれば一時的な処理とも思われるが、江戸中期以降、子供向けに編まれた節用集が色々と登場し、往来物と節用集の折衷風のものも多く刊行され、付録記事などでも往来物と節用集の接近が目立つ。

②女子用往来は全て「女書并手本類」の項に掲載された。③女子用往来物としての「百人一首」、④女訓書を主とした「女書類」、⑤「女筆手本」の3部が本項中に収められた^{*19}。

・「女筆手本」部に掲げた36点のうち、『女徒然色紙染』は元禄6年(1693)刊『女筆四季文章』(中村甚之丞書)の改題本^{*20}であり男筆女用文章である。また、『女用文字宝鑑』『女用花鳥文章』は女用文章だが女筆とは思われない。さらに、『女

童子往来』は「大和廻菟田詣さそいにやる文」「三条西殿御息女えの文」「百人一首」「伊勢物語」「二十四孝」などを収録する合本系女子用往来であり、『女節用文字袋』『女節用嬰粟章(嬰粟袋)』は往来物とも見なせるが基本的に節用集である。上記のうち『女童子往来』以下3点は「女筆手本」ではなく本来「女書類」に相当すべきものである。逆に「女書類」には明らかな女筆手本が数本含まれている。以上から女筆手本類を抽出すると、次の38点になる*21。

女書類

- | | | |
|--------------|-----------------|---------------|
| 一 女堪忍(記)大倭文 | 一 女(要)珠文庫 | 三 女万葉稽古草紙 林氏蘭 |
| 一 女今川姫鑑 窪田つる | 一 女五常訓大和織 寺田*22 | |

女筆手本

- | | | |
|------------------|------------------|--------------------|
| 三 女用文章綱目*23 | 女筆柳の枝*24 | 三 女筆しのすゝき 長谷川妙貞*25 |
| 二 沢田女筆手本 | 三 小野於通手本
おつう | 同菟田草 |
| 三 女筆君が代 長谷川妙貞 | 三 同藻塩草 | 三 同難波津 長谷川妙貞 |
| 三 同さゞれ石 同 | 三 同錦の海 同 | 三 同美千しば
みち |
| 二 同嵯峨野 | 三 同琵琶海辺 | 同花たちばな |
| 同白露 | 同玉かつら | 同浅香山 沢田お吉*26 |
| 三 同若みとり 須磨十一歳*27 | 三 同色みとり 須磨十一歳*28 | 一 同菟田参詣
さんげい |
| 一 同筆の海 | 三 女用文章大成 | 一 四季女文章*29 |
| 一 女用文御伽文庫*30 | 一 女筆文車 | 一 女文庫高蒔絵*31 |
| 一 女徒然色紙染 | 一 女用文字宝鑑 | 一 女世話用文章*32 |
| 一 女用花鳥文章 | 三 女筆春日野 長谷川貞 | 一 女筆千代見草*33 |

*以上の多くが新刊書であり、女筆手本類が驚くほどの勢いで出版された事情を物語る。

○『宝暦4年書目』(1754年)

・四半世紀を経た『宝暦4年書目』も掲載書のほとんどが新刊書。分類項目は41から40へとわずかに減少したが、女子用往来が「女書並女筆」の項目中に「女書」と「女手本」を区分して掲載する一方、かつて同項目中にあった「百人一首」を全て「歌書」項に移動。「女手本」項に掲載分の女筆手本類は次の35点。

- | | | |
|-------------------|----------------|----------------|
| 三 女筆指南集 長谷川妙貞 | 三 同続 同 | 三 同続後 同 |
| 一 同近江八景 同 | 一 同文林宝箱 居初氏*34 | 三 同岩根の松 長谷川 |
| 二 同初音の道 慈忍 | 三 同秋津風 垣内すへ | 三 同都の春 ぬい |
| 一 同九重錦 | 三 同蟬の小川 長谷川 | 三 女筆みよし野 しな |
| 一 女用紅葉の錦 中谷治八 | 一 女教文章鑑 蘭筆 | 一 女消息花文庫 玉枝*35 |
| 三 女消息歌枕 | 一 女万用筆の海 | 二 花紅葉都の錦 長栄軒 |
| 一 女要文通筆海子 品女 | 一 女用章 近藤秀*36 | 一 女訓文章真砂浜*37 |
| 一 女要新玉文章 寺田氏*38 | 一 女文台綾袋 田中甚介 | 一 女文章都織 |
| 一 女用婦美硯 | 三 女筆姫小松 中川内記 | 一 女文通花の園 |
| 一 女教文海智恵袋 志田垣氏*39 | 一 女文要袖硯 雪悦齋*40 | 一 女筆小倉手本 高木佐世 |
| 一 女筆芦間鶴 宮崎氏 | 一 女筆みすの雪 妙貞*41 | 一 女用文唐錦*42 |
| 二 女筆四季の友 | 一 長谷川筆の錦 妙貞 | |

・享保に続き、元文・寛保・延享・寛延・宝暦初年までの約20年間は次々と女筆手本が上梓されたが、本書目を最後にその勢いを失い、以後下降線を辿る。

○『明和9年書目』(1772年)

・江戸期最後の書籍目録『明和9年書目』では、まず「百人一首」が群を抜く勢いで伸びている。その多くが新刊書で72点に及ぶ。また、「女書」項と「女筆」項に分けて掲載されている女子用往来は全部で57点で、そのうち「女筆」項・「女書」項中の女筆手本類は約30点と推測される。しかし、その多くは男筆と考えられ、女筆と確定または推定できるのは次の7点に過ぎない。*43

女書

- 二 女今川教訓鑑 中村氏女 二 女要今川教訓鑑 つな女 一 女通用文袋 都音
 一 女教倭文庫 雪坑斎^{*44}

女筆

- 一 女筆春の錦 小野おつう 一 同木葉とめ 生子 三 同浅香山 志賀氏^{*45}
 三 名媛墨妙集 資衡輯^{*46} (参考)

★以上のように、女筆手本類は最初の書目から登場し、以後徐々に増加しながら、事実上最後の『明和9年書目』まで一貫して記載された。ただし、女筆手本類が属する分類項目はその時々状況によって異なり、刊行点数が際立ってくると「女手本」また「女筆手本」「女筆」といった独自の項目(または小項目)が設けられた(推移は下表参照)。

■書籍目録による「女筆手本類」の分類の変化 ※点数は新規掲載のみ。また*印は分類に関する注記

寛文6年(1666)頃	往来物并手本	4点	*本目録以前刊行の女訓書等がまとまって欠落。
寛文10年(1670)	↓ 女書	4点	*女訓書類が独立項目となる。
寛文11年(1671)	↓ 女書	0点	*微細な変化を除き同上。
延宝3年(1675)	↓ 女書	0点	*同上。
貞享2年(1685)	↓ 往来(増補)	5点	*「女書」から「往来」項末尾「増補」へ移動。
元禄5年(1692)	↓ 女手本	4点	*「往来」項末尾に「女手本」項を新設。
元禄12年(1699)	↓ 女書	0点	*再び「女書」項に一本化。
享保14年(1729)	↓ 女筆手本	38点	*「女書并手本類」中に「百人一首」「女書」「女筆手本」を区分。
宝暦4年(1754)	↓ 女手本	35点	*「女書」と区別。
明和9年(1772)	↓ 女筆	30点	*「女書」と区別。点数は推定。

- 当初は、女筆手本類も女子用往来も、一般の往来物と同じ扱いであったが、『寛文10年書目』からは女筆手本類を含む女子用往来が「女書」として独立。途中『貞享2年書目』では、「女書」から「往来」項末尾の増補部分に移動するという事態も生じたが、次の『元禄5年書目』では始めて「女手本」という新項目が設けられた。これは貞享～元禄期の女筆手本の増加傾向に対応したためである。
- その後、『享保14年書目』からは書目の掲載方針が一変して原則新刊書のみとなったが、本目録では「女書并手本類」項に「女書」「百人一首」とともに「女筆手本」の小項目を設け、実に30点以上の女筆手本を掲げている。本目録から新本中心になったのは先述の通りだが、それにしても本書目の新刊女筆手本類は、それ以前と比較して爆発的な増加である。次の『宝暦4年書目』でも30点以上の新刊の女筆手本を載せる(これらの多くが享保末年刊行である)から、宝暦初年以前、特に享保期の突出ぶりには目を見張るものがある。
- このように、女筆手本類の全盛期は享保期と言える。しかし、女筆手本類には、女筆の場合と男筆の場合とがあり、また、女筆でも純粋な手本と用文章の違いもあり、これらを厳密に区別して見ていくと、刊行点数上の消長の経緯は必ずしも一様ではない。ここでは、女筆手本類全体の盛況期を享保期であることを確認しておく。

第2章 女筆手本類の出版動向

・女筆手本類の諸類型は、「女性が学ぶため」という編集目的は共通するが、その他の点ではそれぞれ異なる要素を含むが、近世期においては種々の女筆手本類は同様に隆盛し、同様に衰退していった訳ではない。→ 結論から言うと、女筆手本類を次のように区別したらよいと考える。

- ①女筆手本…書き手も学び手も女性。各頁の全面に大字で書かれた純然たる手本。内容はほぼ消息・教訓・地理のいずれかであるが大半が消息で、消息文の場合は語注や言い替え表現(替え言葉・替え文章)を伴わず、また消息文の見出しや目次を設けない場合が多い。
- ②女筆用文章…書き手も学び手も女性。実用的な消息例文を主とする女用文章で、本文上欄(頭書)の記事や、例文の見出し、目次などを伴うものが多い。
- ③女筆往来物…書き手も学び手も女性だが、純然たる手本でも女用文章でもないもの。
- ④男筆女用手本…前記①の性格を有するが、書き手が男性のもの。
- ⑤男筆女用文章…前記②の性格を持つが、書き手が男性のもの。

→ 以上のうち、「書き手・学び手が女性」でしかも純然たる「手本」である①こそが女筆手本にふさわしい(狭義の女筆手本)。しかし、②や③も手本としての要素を併せ持つから、これらも女筆手本の一つと見なせるし、④や⑤でも書名に「女筆」と称するものがある以上、全く無視する訳にはいかない。「女筆」という概念が拡大解釈された過程もそれなりの意味を有するからである。そのため、①を「女筆手本」、①～⑤を含む総体を「女筆手本類」と呼んで区別する。

・江戸期の女筆手本類は未発見のものが多く、筆者の名前や性別が不明のものも少なくない。そのうえ、女筆手本は題簽が剥落すると原題が分からなくなるケースも多い。端本になると、刊年はおろか、板元・作者もほとんど分からなくなる。ほかに稀であるが、巻ごとに外題が異なる場合もある。例えば、長谷川豊(のちの妙躰)筆、宝永4年(1707)刊の『わかみどり』である。これは最初に3巻3冊で発行され、上巻外題が「わかみどり」、中巻・下巻外題がそれぞれ「わかたけ」「うすもみち」となっていたが、後印本では1冊に合綴され、「わかみどり」の題簽が貼られた。

・従来、女筆手本類についての総合的な研究はほとんどなかったが、その中でも、「女筆」の項目を設けて比較的詳しく解説しているのが小松茂美氏の『日本書流全史』である。それでも、同書上巻「VIII・8、女筆」で紹介する女筆手本は、長谷川妙躰筆の『さゝれ石』『難波津』『蟬小川』『わかみどり』^{*47}のわずか4本である。また、「V・2B」の「著者所蔵手習手本一覧」の「女筆」項には45本の往来物・手本類を並べるが、女筆手本類に該当しないものが多分に含まれており、逆に、別項目中に明らかな女筆手本が混在しており、氏が女筆とは「女性の筆跡」と規定しているにも関わらず、その基準がほとんど守られていない一覧になっている。そこで、同書で紹介されている女筆手本類を私の分類によって配列し直すと次のようになる(一般の女子用往来は含めない)。

- ①女筆手本…『京師往来(原題「わかみどり」)』『難波津』『女筆いろみどり』『蟬小川』『女筆手本(原題「しのすゝき」)^{*48}』『さゝれ石』
- ②女筆用文章…『女教文章鑑』
- ③女筆往来物…該当書なし。
- ④男筆女用手本…『長雄四季女文章(仮題か。原題「長雄女年中用文」)』『松華法帖(外題「^{さやま}猿山松華往来」または「猿山四季かな文」)』『大橋かな手本』『月なみ消息』『散し文』『年中かな文』『女筆四季往来』
- ⑤男筆女用文章…『女文章大全』『女文通宝袋』『女書札文庫』『女用文倭錦』『女文章四季詞鑑』『女文章手習鑑』

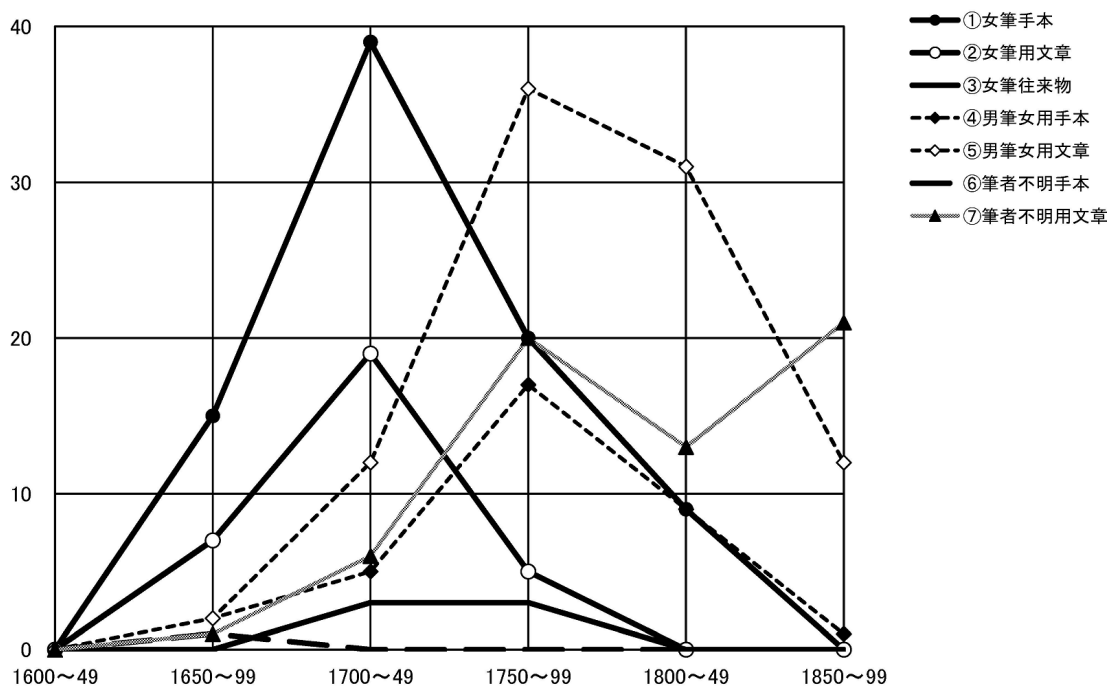
*このほか、筆者不明の数本も女筆手本類に含まれると思われる。また原本未見のため不確実だが、『琵琶のうみ』は『享保14年書目』に載る「女筆琵琶海辺」かもしれないし、宝暦13年刊『女用文』は『女用紅葉の錦』(中谷治八筆)の可能性が高い。とすれば、前者は①または④、後者は⑤に該当する。

→ 比較的女筆手本に詳しい『日本書流全史』でも、紹介されている女筆手本類は20点足らずである。管見の限りでは、今日現存するか書名が伝わる女筆手本類は巻末「刊行一覧」の通り約300点であるから、小松氏の紹介する女筆手本類はごく一部に過ぎない。

★このように女筆手本類は従来詳細に紹介されることがなかったため、本稿には「女筆解題」と「刊行一覧」の双方を付録とした。さらに、「刊行一覧」に掲げた約300点の女筆手本類によって、分類別・年代別の刊行状況をグラフ化したものが次の「刊行状況」である。一部推定を含め、極力、女筆・男筆のいずれかに区分を試みたが、判定のよりどころのない数点は「筆者不明」とした。年代区分は半世紀ごとと大雑把だが、①～⑦それぞれの刊行期間やピークの時期が明快に異なっているのがよく分かるであろう。分類ごとに出版動向の時期や特色を次にまとめておく。

女筆手本類刊行状況

	①女筆手本	②女筆用文章	③女筆往来物	④男筆女用手本	⑤男筆女用文章	⑥筆者不明手本	⑦筆者不明用文章	合計
1600～49	0	0	0	0	0	0	0	0
1650～99	15	7	0	2	2	1	1	28
1700～49	39	19	3	5	12	0	6	84
1750～99	20	5	3	17	36	0	20	101
1800～49	9	0	0	9	31	0	13	62
1850～99	0	0	0	1	12	0	21	34
合計	83	31	6	34	93	1	61	309



- ①女筆手本…享保期をピークに江戸初期から中期にかけて約80点の刊行を見た。江戸前・中期の現存しない女筆手本や筆者不明の女筆手本の大半がこれに相当すると考えられる。
- ②女筆用文章…前記①とほぼ同様の推移をたどるが、常に①のほうが優位にたっている。江戸中期頃までに約30点が刊行された。
- ③女筆往来物…特にピークは見られず江戸中期に数点が出版されている。①や②に比べると女筆往来物はわずかであり、女子用往来の多くが男性によって編まれ、書かれたものと考えられる。
- ④男筆女用手本…宝暦以降にピークを迎え、江戸全期を通じて約30点の刊行である。
- ⑤男筆女用文章…江戸全期にわたり行われたが、特に江戸後期に急増し、合計約90点と極めて多い。男筆の場合、女用手本よりも女用文章の方が圧倒的に多い点で、女筆と好対照をなす。

いずれにしても、ほぼ18世紀半ばを境にして女筆手本類の中心が「女筆から男筆へ」、また「手本から女用文章へ」と変化しているのが読みとれる。そして、女筆では「手本」が「用文章」の約2.7倍に達している一方、男筆では「用文章」が「手本」の約2.7倍と、全く正反対の状況を呈している。さらに、手本から女用文章への変化は、概ね大本から半紙本・中本への小型化の傾向をもたらす結果となった。

女筆手本関係年表

世紀	元号	西暦	女筆手本関係	女性書札礼関係	書流
16世紀	16世紀中葉 16世紀末頃	1530~60頃		『女房筆法』成立。女性書札礼の最古本 『女房進退』成立。最初の体系的な女性礼法書	
17世紀	慶安3年 慶安5年 万治2年頃 万治3年 万治頃 貞享4年 貞享5年 元禄3年 元禄5年 元禄6年 元禄7年 元禄8年 元禄13年	1650 1652 1659 1660 1658~ 1687 1688 1690 1692 1693 1694 1695 1700	『小野おづう手本』(小野通*2代か)刊行 『女庭訓』(窪田やす)刊行 『女初学文章』(窪田やす)刊行 『女筆往来』(男筆か)刊行 『女今川』(作者不明)刊行 『女文章鑑』(居初津奈)刊行 『女書翰初学抄』(居初津奈)刊行。 ○この頃『女節用集』(山本序周)撰作 『女重宝記』(苗村文伯)刊行。 ○この頃女筆への関心高まる 『女筆四季文章』(中村甚之丞)刊行 『しのすゝき』(長谷川妙躰)刊行 『女実語教・女童子教』(居初津奈)刊行 『(新)女今川』(沢田吉)刊行 『女世話用文章』(前田さわ)刊行。男子一般の用文章への接近	『をむなかへ見』刊行。刊本最初の女性書札礼 『女式目』刊行。より丁寧な書札礼。 同年刊行の『女諸礼集』には書札礼の記事なし 同書「文かきやうの指南十ヶ条」は書札礼の一般化を進めた先駆。妙躰流を批判	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">お通流*初代 二代</div> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">妙躰流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">長雄流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">馬場流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">石川流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">寺沢流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">玉置流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">本目流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">首藤流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">大橋流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">篠田流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">上田流</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">媛山流</div> </div> </div>
18世紀	宝永1年 宝永2年 正徳4年 享保9年 享保10年 享保20年 元文6年 延享4年 寛延2年 宝暦12年 明和5年 天明9年	1704 1705 1714 1724 1725 1735 1741 1747 1749 1762 1768 1789	『みちしほ』(男筆か)刊行。『しのすゝき』が京都で流行 『女筆子日松』(女筆)刊行。女筆の男性化現象を指摘 『難波津』(長谷川妙躰)刊行→ 『女筆いろみどり』(春名須磨11歳)刊行 『錦乃海』(長谷川妙躰)刊行。妙躰流の真髓「生字」に言及 『女用文章唐錦』(春名須磨)刊行。女性の漢字使用を批判 『女消息華文庫』(丹羽房)刊行→ 『女文章都織』(居初津奈)刊行 寛延2年に長谷川貞寿が、また、妙躰最晩年の宝暦3年に長谷川品が妙躰流の手本類を刊行 『女筆初瀬川』刊行。妙躰流を装った手本がこの頃まで続く ○この頃から女筆→男筆/手本→用文章の動きが顕著になる 『女学範』(大江資衡)刊行。代表的な女筆を紹介 『女文章四季詞鑑』(北尾政美編)刊行。漢字表記の合理性を主張	同書「女中文書やう心得の事」は簡潔な書札礼 同書「女文章教訓鑑」は書札礼の庶民化の例 『女諸礼綾錦』(北尾辰宣)刊行。町人女性用の礼法書として普及	
19世紀	文化3年 文化4年 天保10年 天保12年	1806 1807 1839 1841	妙躰筆『女筆指南集』『同続指南集』『同岩根の松』を2冊に合本して刊行 『ちらし文章』(加藤翠玉堂)刊行。江戸期最後の女筆手本 『女筆花鳥文素』(内山松陰堂)刊行	『新增 女諸礼綾錦』(木村繁雄・部関牛編)刊行。寛延板の簡略化	
(明治)	明治11年 明治30年 明治33年	1878 1897 1900	『女日用文例』刊行。準漢文体のみの女用文章 同年刊『女児私用文例』は女性の漢語知識の必要を説く 小学校令施行規則で教育書体・字体の統一 ○この頃までに、女文における草書・散らし書きが消	『日本女礼式大全』刊行。同書「文の書き様」はほとんど津奈と辰宣の書札礼の模倣。	

- *1 『日本国語大辞典』(昭和五六年 小学館)第八巻「女筆」項に「女の筆跡。女流の筆法。おんなで。じょひつ」とある。
- *2 このほか書肆が独自に編んだ個別の書目も出版されている。
- *3 本書は写本だが、刊本が実在した可能性も否定できないという(次項『江戸時代 書林出版書籍目録集成』第一巻一一頁)。
- *4 『江戸時代 書林出版書籍目録集成』(慶應義塾大学附属研究所道文庫編 昭和三七~三八年 井上書房)。
- *5 本書の正式名称は『和漢 書籍目録』である。ただし年号による通称の方が一般的で分かりやすいため、以下、刊行年をもって「〇〇年書目」のように記載した。
- *6 前掲『江戸時代 書林出版書籍目録集成』第一巻九~一〇頁。
- *7 前掲『江戸時代 書林出版書籍目録集成』第一巻一二頁。
- *8 この「二ノ」は二冊本の意味に解釈できるが、後続の書目により『小野おづう手本』二冊本を指すものと考えられる。
- *9 因みに言うと、ここで追加分的女子用往来はほとんどが寛文六年以前の刊行でありながら『寛文年間書目』にまるまる脱落しているのである。要

するに『寛文年間書目』の編集上の遺漏ミスを『寛文一〇年書目』で補ったというのが真相であろう。この手の目録がまだまだ不十分なものであったことを窺わせる。

- *10 『初学文章』は、書簡作法と諸礼法を主内容とするから、より適切な分類項目に収まったといえよう。また、本書の初刊本は寛文六年(一六六六)刊『初学文章抄』である。主に上・中巻は書札礼を基本とし、随時書簡用語や消息例文も載せ、下巻は主人や客への給仕の際の作法が中心である。なお本書の下巻を大幅に増補・改編した『初学文章并万葉方』が寛永一一年(一六三四)に刊行されたが、これが『寛文一〇年書目』のいう「初学文章増補」と考えられる。従って、寛文六年板の後、数年足らずで増補版が刊行されたのであり、以後、この二つが並行的に板行された。また、『初学文章』は万治三年(一六六〇)刊『女初学文章』の題材などに強い影響を与えている。
- *11 頭書を付す往来物はこれ以前にもあった。例えば、万治三年刊『女初学文章』は女筆手本類では最も早いものの一つだが、頭書注釈を付けており、頭書付きの女子用往来としても最古である。
- *12 本書目の「女書」項には『女誠』から『平かな列女伝』までの一八タイトルを載せるが、『延宝三年書目』に見えない追加分は『女じんぎ物かたり』『女さんげ物かたり』『さよころも』の三本である。
- *13 本書目では『増補女初学文章』が二カ所に出てくるが、その一方で『女初学文章』の書名が消えている。次の書目には『女初学文章』と『増補女初学文章』の双方の書名を挙げていることからすれば、本書目での重複は旧版と増補版の二種を記載すべきものを誤ったものと見ることができよう。
- *14 『尊円かな手本』『式部卿かな手本』『百人一首』『歌仙』は女筆手本類とは別種のものと考え、計算に入れていない。
- *15 当然のことであるが、ここの『女今川』は沢田吉作の元禄一三年板ではなく、作者不明(窪田つな筆)の貞享四年板を指す。
- *16 先の『元禄五年書目』に見えた女筆手本類のうち、『女初学文章』『女書翰初学抄』『女文章かゝみ』『ひいな女筆手本』の四本が削除されたため、女筆手本類は一五点から一点になった。
- *17 例えば、本書目に見える約一五〇点の往来物(「女書并手本類」中の女子用往来等は除く)で見ても、①元禄以前に刊行された旧版のものが約一割、②宝永～享保に刊行されたが、同内容のものが既に元禄以前に存在する旧編の新刊書が約二割、③宝永～享保に新たに作られた新編の新刊書が約七割という具合で、収載往来物の九割が新刊書である。
- *18 前掲『江戸時代 書林出版書籍目録集成』第三巻九頁。
- *19 ・～の各部はそれぞれ改訂されている。・は三〇点で全て新刊書であろう。⑥も約三〇点で九割以上が新刊書である。・は三六点でその八割以上が新刊書である。「女書并手本類」全体で見てもやはり九割近くが新刊書となる。
- *20 両者の異同については『稀覯往来物集成』(平成一〇年 大空社)第二八巻解題「女つれづれ色紙染」(拙稿)を参照。
- *21 女筆手本や女用文章以外の一般の女子用往来は除く。
- *22 本書目は作者を寺田とするが誤りで、本書の作者は坂本源兵衛(大坂本町五丁目住)である。『女五常訓』初板本の享保一四年板(東京家政学院大学蔵)と、それに続く元文三年板(家蔵)にはその旨明記されている。また、『女学範』によれば本書の筆者は女性という。
- *23 『女用文章綱目』と称するものに二種あるが、いずれも三冊本で女筆用文章である。
- *24 本項のように冒頭に漢数字のないものは冊数が無記載である。
- *25 本書目は『しのすゝき』を妙筆とするが、『女学範』は長谷川貞(妙筆と別人とする)筆とし、『大坂本屋仲間記録』一一巻「書籍分類目録二」二七六頁には「筆者妙貞」とある。原本の大半に筆者の記載がないが「長谷川豊」と刷り込まれた一本が最近発見された(青裳堂書店蔵)。豊は後の妙筆であるから、豊も妙筆も貞も同一人であることはほぼ確実である。
- *26 本書とは別に男性書家による『浅香山』という男筆女用手本が存する。巻末「刊行一覧」参照。
- *27 本書は長谷川豊(妙筆)の筆であるから、本項の記載は明らかに誤りである。
- *28 前項と異なり、本書は須磨の筆である。原本にもその旨記載されているが、ここでの年齢表記は書籍目録では異例のことである。
- *29 小野通の『四季 女文章』は三巻三冊だが、これを一冊に合綴したものか。
- *30 本書は女用文章であるが、現存せず、女筆か否かは不明である。
- *31 本書は元禄三年刊『女書翰初学抄』の頭書などを改めた改題本であるが、原板が居初津奈の筆であるから女筆にカウントした。本書目以降は新刊書中心の書目となったが、改題することで単に目新しく見せるばかりでなく、このように再び書目中に掲載されるメリットもあった。
- *32 本書の初板本は三巻三冊であるが、この時点では一冊に合綴されていたのであろう。
- *33 本書は妙筆の『ちよみぐさ』に相当すると思われるが、同書は三巻三冊である。
- *34 本書は元禄三年刊『女書翰初学抄』の改刻・改題本である。西川祐信の挿絵を頭書に加えたほか、前付等の付録記事が変化した。
- *35 作者・玉枝は男性だが、筆者は女性(丹羽房)である。
- *36 原本には「進藤秀」とあるから、本書の「近藤」の記載は誤りである。
- *37 本書は元禄一七年刊『女五常盤の松』の改題本である。
- *38 本書は享保六年刊『女要珠文庫』(寺田絮柳作)の増補版であろう。
- *39 作者・志田垣氏は男性だが、筆者は女性(長谷川貞寿)である。
- *40 「雪悦斎」は「雪坑斎(北尾辰宣)」の誤りであろう。
- *41 本書現存本は、三巻三冊であるが、三巻を一冊に合綴したものもあったか。
- *42 本書は、先の目録(『いろみどり』)では年齢まで記載され話題になった春名須磨の作品だが、本書目では筆者名すら出ていない。なお、『女用文章唐錦』原本には彼女の署名がある。
- *43 女用文章と百人一首の合本等は把握が困難なため除いた。
- *44 作者・画工は北尾辰宣(雪坑斎)だが、筆者は長谷川妙筆である。
- *45 男性書家によるものか。同名の女筆手本が三種ある。
- *46 本書は古今の女筆の筆跡を集めたものというから、一般の女筆手本とは性格を異にする。ここでは参考までに掲げた。
- *47 同書で小松氏は「？」または「京師往来」と紹介する。
- *48 小松氏は「女筆手本」の仮題を付す二本を掲げるが、いずれも『しのすゝき』である。